



〈雑録〉米國ニ於ケル信託會社ノ現況(2)

松村, 光三

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 20(2):263-274

(Issue Date)

1916-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052481>



米國ニ於ケル信託會社ノ現況 (其二)

商學士 松 村 光 三

第二 米國信託會社ノ近狀

以上米國信託會社發達ノ沿革ニ就テ敍說シタルガ、更ニ其近狀ヲ各方面ヨリ觀察シテ金融界ニ於ル彼等ノ勢力ヲ窺知スル所アラシ。

(一) 資産負債狀態 既ニ説明シタル如ク、信託會社數ノ統計蒐集ニ就テ、通貨監督官報告ト「米國信託會社報告」トノ間ニ多少ノ相違アリ、從テ其財産統計ニ關シテモ亦自ラ多少ノ扞格ナシトセズ。試ニ次頁ニ掲ゲタル統計表ヲ通覽スレバ、先ヅ資産ノ部ニ於テ貸附及手形割引等ニ最モ多クノ資金ヲ運用シ、其額三十一億五千萬弗餘ニ上リ、次ニ株券社債等ノ有價證券放資十三億餘(一九一四年度)ニ達セリ。而シテ、手元在高及他銀行預金ハ資産總額ニ對シテ、五箇年平均一割九分弱ニ該當ス。更ニ負債ノ部ニ於テ、資本金ハ過去五箇年間ニ五千七百萬弗餘ヲ増加シ、而モ積立金及配當セザル利益金ハ七千六百萬弗ヲ増加シテ、其總額ハ常ニ資本金ヲ超過シ由テ以テ信託會社ノ基礎一般ニ鞏固ナルヲ立證シ、更ニ預金ノ受入ハ五箇年間ニ十億四千萬圓ノ増額ヲ示セリ。而シテ其準備金ノ割合ニ就テハ、多年批難ノ焦點トナリ、通貨監督官ノ報告ニ據レバ、預金及他銀行借入ニ對スル、手元在金及銀行預金ノ割合即チ準備金ハ一八五七年乃至一八八四年間ニ一割二分八厘ヲ最高トシ、時ニハ僅ニ七分八厘ノ低率ニ下リシコトアリ、爾來漸次其割合ヲ増加シ、一九〇八年乃至一

九一三年間平均二割四分六厘就中一九〇九年度ハ二割七分四厘ノ高率ヲ保テリ。於茲乎信託會社ノ準備金ニ對スル批難ハ手元在金ノ多寡如何ニ向ケラル、ニ至リ、此割合ニ就テハ、過去三十九年間ノ平均僅ニ五分一厘強ニ過ギズ、一八七五年ノ一割〇六厘ヲ最高トシ、一九〇一年ノ二分ヲ最低トス、殊ニ一八九七年乃至一九〇八年間ノ平均ハ僅ニ三分四厘ニ低下シ、其以降漸次増加シテ一九一三年迄ニ平均八分五厘ト爲レリ、然レドモ他ノ金融機關ト比較スレバ尙準備金ノ過少ナルヲ免レズ

(二)各州ニ於ル統計 今一九一三年六月末日現在ノ統計ニ基キ各州ニ於ル信託會社分布ノ狀況ヲ觀ルニ、其會社數ニ就テハペンシルベニア第一位ヲ占メ、インデアナ之ニ次ギ、イリノイス、ニウジャーシー、紐育、テキサスノ順位ヲ保チ、更ニ總資力ニ就テハ紐育州第一位ヲ占メ、ペンシルベニヤ之ニ次ギ、イリノイス、マサチュセツツ、オハイオ等ノ順位ナリ。

米國信託會社資産負債狀態 (「米國信託會社」報告拔萃)

資産ノ部	一九一〇年	一九一一年	一九一二年	一九一三年	一九一四年
株券及社債	一九一〇年 (一五二七會社) 九四七、四七〇、九一	一九一一年 (一六一六會社) 一、一五五、四九三、七五四	一九一二年 (一五七九會社) 一、四〇四、五五二、五五九	一九一三年 (一七三二會社) 一、三三三、四七九、三〇三	一九一四年 (一八二二會社) 一、四〇五、五五九、九一六
貸附手形割引等	二五〇、四三六、四〇一	二六四、八四六、〇八五	二七〇、八八五、六五〇	二九一、三三三、七四六	三、一五七、〇〇八、八七〇
手元及銀行預現金	八九五、五七〇、七五	一、〇四三、六六〇、九五	一、〇九八、〇九七、九五	九三七、五三三、三三四	一、〇七六、〇四二、九〇
土地家屋家具保護	一六四、五三三、三三	一、三三九、四二、三	二五五、〇九七、五三	一八六、七四〇、〇〇	二〇一、七三三、一七三
預リ金庫設備其他	一〇二、五七五、〇〇	一、六二七、八二六、六	二〇一、九四四、九〇〇	二〇六、一六九、五八五	一八六、四七〇、四二八
合計	四六〇、三三三、二二	五、一六八、五三三、〇六	五四九、〇五七、〇四七	五四七、五九三、八九九	五、九三三、九六八、九〇
負債ノ部					
資本	四四六、一六八、二一〇	四四一、五四五、七九	四六八、四二二、七九	四六八、一八一、六二五	五、〇七五、〇一三、一

積立及配當セザル利益	五九、九二、一四	五、六〇、八八、九一	五、七二、四七、八七	五、九二、七〇、六五、四〇	五、九五、其、〇、三、二
預金	三、三〇、八二、七、七〇	三、六〇、三三、九、五五	三、八五、八三、五、一四、七	四、〇五、六六、一、一〇、三	四、三〇、七、六、〇、四、一〇
他銀行借	一、八七、八七、〇、六	二、四九、四六、九	二、七九、〇、七、五	二、四六、五、一、五、九、二	二、八〇、九、四、七、一、〇
其他ノ借	一、四八、二五、一、六、三	三、五二、一三、九、四	三、三三、五八、五、七、五	一、七、八、〇、七、九、三、五	一、九七、六、〇、七、七
合計	四、六〇、三三、二、二	五、一八、五三、〇、六	五、四九、〇七、〇、四、二	五、四七、五九、七、三、八、九	五、九二、四九、九、八、九、〇

米國信託會社報告

通貨監督官報告

州名	會社數	總資力	會社數	總資力
ペンシルベニア	二七四	八七七、六二五、二一六	二八八	七八四、二五九、九二一
紐育	八〇	一、六七三、六八四、八七六	八〇	一、六六二、〇二五、一一八
インディアナ	一二〇	九六、六六八、八五〇	一三四	一一八、五一〇、〇七〇
イリノイ	一〇三	五五四、一二三、〇四五	五三	五七九、二〇五、五七四
ミシシッピ	九五	二六三、八四九、一三七	一〇二	二七〇、二七二、七二二
マサチューセツツ	六一	三五七、六六九、四六〇	六七	三五二、二二八、七六七
ガバ	六五	二八四、二二〇、九七〇	六八	三一二、八八八、六六四

即チ、ペンシルベニア州ニ於ル信託會社ハ、他州ニ率先シテ發達シタル沿革上ノ關係ヨリ其會社數最モ多數ナルモ、紐育州ハ金融ノ中心市場ヲ控ユル結果其資力ハ遙ニ他州ヲ凌駕シ、一會社ノ平均資力ハ二千〇九十三萬弗餘ニ上リ會社經營規模ノ甚ダ大ナルヲ立證シ居レリ。

(三)各都會ニ於ル統計 今「米國信託會社報告」ニ基キ一九一三年現存各都市ノ勢力分布ヲ比較セシニ、費府市第一ニ位シ、會社數五十六、其平均資力七百七十三萬弗ニシテ、紐育市之ニ次ギ、三十五會社其平均資力四千八百八十萬弗、就中余ノ在勤セシ「ガラランチー、トラスト」會社ノ如キハ二億

三千四百六十四萬弗ノ資力ヲ擁シ、其資本及積立金ハ三千萬弗餘、其預金ハ二億弗ヲ超過セリ。之ニ次デ「バンカース、トラスト」會社ハ一億六千六百弗ノ資力、紐育中央信託會社ハ一億二千四百三十六萬弗ノ資力ヲ有セリ。シカゴ市ハ第三位ニ在リテ、會社數三十四其平均資力千四百五十四萬弗ニ當リ、ピッツバーク市ハ三十四會社其平均資力五百九十三萬八千弗トナリ、其他ノ都市ニ就テハ左ニ參照表ヲ掲ゲン。

組		育		會社數		總 資 力	
シ	カ	ゴ	府	三五	一、四六三、九二二、八一四	セント、ルイス	一六
				三四	四九四、五〇五、二九五	プロビデンス	四
費				五六	四三三、〇二二、四八六	ロス、アンゼルス	八
ボ	ストン			二二	二六七、五四〇、三一五	桑 港	五
ピ	ツツ	パーク		三四	二〇一、八九四、八九二	ロチスター	五
クリ	ブランド			一二	一六六、六一五、〇二二	ニウ、オルレンル	九

而シテ紐育以下ロス、アンゼルスニ至ル九市ニ於ル信託會社ノ資力ハ、全國ノ六割二分ニ該當スト云フ。斯テ大資力ヲ擁スル會社ハ重ニ是等少數ノ都會ニ集中サレ即チ現今二千萬弗以上ノ資力アル會社ノ總數三十八ノ内、紐育ハ其十五會社ヲ占メ、シカゴ市七會社、費府及セントルイス市各々三會社ヲ有セリ。

第三 信託會社及他銀行業發達ノ比較

信託會社發達ノ沿革及近況ニ就テ以上敍說スル處アリシガ、百尺竿頭更ニ一步ヲ進メテ、各種金融機關トノ比較對照ヲ試ムルハ頗ル興味アル問題ナラン。

(一)預金高比較 預金額ヲ標準トシテ各種機關ノ勢力ヲ對照センニ、從來信託會社ノ預金ハ他ノ金融機關ニ比シ遙ニ劣位ニ在リシガ、一九〇九年始テ州立銀行ヲ凌駕シ、爾來長足ノ増率ヲ示セリ然モ他ノ三種ノ銀行モ亦累年秩序アル預金ノ増加ヲ獲得シツ、アルハ要スルニ米國民ノ富ノ増殖ノ至大ナルガ爲ニ外ナラズ。左ニ通貨監督官ノ報告ニ基キ各機關ノ預金總額ヲ掲ゲン。

年次	信託會社	州立銀行	貯蓄銀行	國立銀行
一八七五	八五,000,000	一六,000,000	九四,000,000	六九,000,000
一八八〇	九〇,000,000	一〇,000,000	八九,000,000	八八,000,000
一八八五	一八,000,000	三四,000,000	一〇九,000,000	一一七,000,000
一八九〇	三六,000,000	五五,000,000	一五五,000,000	一九四,000,000
一八九五	五四,000,000	七二,000,000	一八一,000,000	一七五,000,000
一九〇〇	一〇六,000,000	一七五,000,000	二四五,000,000	二〇一,000,000
一九〇五	一九〇,000,000	二二六,000,000	三〇五,000,000	三八二,000,000
一九一〇	三〇七,000,000	二七六,000,000	四〇〇,000,000	五二八,000,000
一九一三	三五七,000,000	三〇八,000,000	四七六,000,000	五九五,000,000

由是觀之、一八九〇年ヨリ一九〇〇年ニ至ル十箇年間ニ信託會社ガ個人ヨリ受入レタル預金ノ増額六億九千二百萬弗、即チ約二十割六分ノ増率ニシテ、次ニ州銀行ハ十二割九分、貯蓄銀行ハ六割一分、國立銀行ハ六割三分ノ増率ヲ示セリ。即チ預金總額ヲ比較セバ信託會社ハ最下位ニ在ルモ、然モ其増加率ヲ對比スル時ハ最上位ヲ占メタルモノナリ。越テ一九〇〇年乃至一九一三年間ノ成績ニ就テ觀ルニ、信託會社ノ預金増率ハ二十四割七分ノ巨額ニ達シタルモ、州銀行ハ十四割三分、國立銀行十二割九分、而シテ貯蓄銀行ハ僅ニ九割三分ノ増加ニ過ギズ。斯テ信託會社ハ其増加率ニ於

テ第一位ヲ占メ、増加金額ニ於テハ、國立銀行ニ次デ第二位セリ。尙茲ニ一言スベキハ所謂通貨監督官報告中ニ計算サル、信託會社ノ總數ハ其實際ヨリ稍少數ナルハ既ニ前述シタル所、從テ預金額ノ統計ニ就テモ亦此間多少ノ相違ヲ認メザルニ非ズ。試ニ「米國信託會社」報告ニ掲ゲラレタル統計ヲ引證スレバ、最近ノ預金額左ノ如シ。

一九一二年	三、八五八、三五五、一四七 ^第	一九一三年	四、〇二五、六六一、一〇三 ^第
一九一四年	四、三四七、一六〇、四一〇		

(二)支拂停止數比較 信託會社其他ノ支拂停止ニ關シテ、一八九三年以降發行ノ“Bradstreet”社ノ統計ヲ徵スルニ左ノ如シ、

銀行及信託會社ノ支拂停止數

年次	國立銀行	州立銀行	貯蓄銀行	個人銀行	貸附及信託會社	計
一八九三	一五四	一八四	五〇	一九六	一四	五九八
一八九四	二四	三六	八	一八	三	八九
一八九五	二一	五七	一八	三七	二	一三五
一八九六	四二	六五	二〇	六二	八	一九七
一八九七	二一	二四	一七	四一	二	一〇五
一八九八	四	一二	五	二八	二	五一
一八九九	七	五	五	一八	二	三七
一九〇〇	三	八	二	三〇	一	四三
一九〇一	五	一三	六	三二	一	五六
一九〇二	一	八	三	一六	二	二九

一九〇三	一一	二八	一	四四	六	九〇
一九〇四	一六	二三	一〇	四三	四	九六
一九〇五	一五	一四	五	二五	四	六三
一九〇六	四	一九	二	一七	三	四五
一九〇七	一四	二八	六	二四	一七	八九
一九〇八	一八	三五	九	五五	一五	一三二
一九〇九	五	一〇	一	一八	六	四〇
一九一〇	五	一九	四	一三	三	四四
一九一一	二	三三	一	二〇	五	六一
一九一二	四	一六	二	二三	三	四八
一九一三	一一	三九	三	二二	五	八〇
計	三八六	六七六	一七八	七八二	一〇六	二、二二八
割	一八・四%	三二・二%	八・五%	三七・二%	五・〇%	

即チ二十一年間ノ支拂停止總數ニ對シ信託會社ノ破産ハ僅ニ二十分ノ一ニ過ギズ、反之、私人銀行ハ最モ多數ニシテ、三割七分二厘、次ニ州立銀行三割二分二厘、國立銀行一割八分四厘ノ高率ヲ示シ、貯蓄銀行ハ遙ニ下テ、八分五厘ノ割合ニ過ギズ。即チ單ニ支拂停止數ヨリ觀ル時ハ、信託會社ニ就テ最モ少數ナルノ好果ヲ示シツ、アルモ、更ニ翻テ同期間中ニ營業ニ從事セル各種金融機關ノ平均數ヲ基礎トシテ破産數ノ割合ヲ比較セバ次ノ如シ。

二十一年間平均會社數

支拂停止割合(一萬分比例)

州立銀行
國立銀行

七、四〇〇
五、〇三九

四三
三六

貯蓄銀行

貸附及信託會社

一、二九〇

一、〇〇〇

六六

五〇

即チ支拂停止ニ就テ信託會社ハ諸他ノ金融機關ヨリ必シモ劣惡ナル結果ヲ示サズ。而シテ是等支拂停止會社ノ資産及負債額ハ、共ニ國立銀行ノ夫ニ次デ多額ニ上ルモ、玆ニ注意スベキ要件ハ過去二十一箇年間ニ信託會社ノ支拂停止ニ由ル負債ノ五割二分ハ一九〇七年度ノ大恐慌中ニ發生シタルモノニテ、當時不況ノ災ニ陷レル十七會社中其過半數ハ翌年再ビ營業開始ノ氣運ニ向ヒ、其他ノ多クモ預金者ニ損害ヲ蒙ラシムルニ至ラズシテ清算ヲ完了シタリト云フ。斯テ一九〇七年ノ恐慌ニ際シ、失敗セル信託會社ノ損失五百五十萬弗ノ中約八割ハ僅ニ一ノ「カリホルニア保管及信託會社」ノ破産ニ歸ス可キモノナリ。殊ニ當時恐慌ノ中心タル紐育州ノ如キ、預金者ニ何等ノ被害ヲ及ボサルシハ畢竟信託資金ノ運用ヲ誤ラザリシガ爲ナラン。要スルニ、同恐慌ハ信託會社ノ大發展後始テ遭遇シタル災厄ニシテ、爾來今日ニ至ル迄頗ル満足ナル進歩ヲ繼續シ居レリ。

第四 米國信託會社發達ノ原因

既ニ説明シタル如ク歐洲各國ニ於ル信託業務ハ先ヅ箇人企業トシテ發達セルニ反シ、米國ニ於テハ當初ヨリ會社企業トシテ發達シ、殊ニ最近十數年間頗ル顯著ナル隆盛ヲ致シタルハ、固ヨリ米國經濟社會ノ事情ト、信託會社其モノ、特質ニ原因セズンバアラズ。即チ米國信託會社ハ米國當代及國民ノ要求ニ順應セル制度ニ外ナラズ。以下少シク米國ノ經濟事情及法制ヲ論ジ、更ニ一步ヲ進メテ信託會社ノ特質ニ論及シ之ガ發達ノ原因ヲ逐次研究スルアラントス。

(A) 經濟社會上ノ原因

(一) 第一ノ原因トシテ箇人ノ富ノ蓄積ヲ舉ゲザル可ラズ。國民經濟ノ發展ニ伴フテ富ノ増殖セルハ文明各國共通ノ現象ナリト雖、殊ニ天然ノ恩惠頗ル豊富ニシテ、且歐洲舊國ノ如ク因襲ノ存在セザル新興國ニ於テハ自ラ其趣ヲ異ニセルモノアリ。近時米國ニ於ル富ノ増殖夥シク、國民財産ノ評價既ニ世界ニ冠タリト傳フ。斯テ富豪ノ増加著シク、殊ニ箇人主義法律思想ノ發達ハ其財産ノ管理及處分ニ就テ特殊ナル財務機關ノ發達ヲ必要トス。即チ信託會社ノ業務就中箇人信託即チ(一)財産ノ管理、(二)遺言ノ執行、(三)裁判所ノ命令ニ依リ遺産管理人、清算人及破産管財人ノ事務、(四)信託資金ノ受領等ハ社會ノ需要ニ應ジテ勃興シタルモノナリ。

(二) 第二ノ原因ニ於ケル富ノ増殖アルノミナラズ更ニ會社團體ノ形ニ於テ其増殖驚ク可キ者アリ。即チ會社企業數及其資産高ノ莫大ナル増加ヲ示シ、殊ニ企業ノ合同集中盛ニシテ、就中「トラスト」ノ形式續出セルハ全ク米國特質ノ經濟現象ニ外ナラズ。斯ル多數ノ會社ノ用務ヲ處理スル爲ニ、茲ニ會社信託業ノ發達ヲ促シタルハ固ヨリ然ル所ニシテ、所謂會社信託業務トシテ(一)資本證券ノ引受及發行、(二)社債及株券ノ名義書換及登錄事務、(三)財務代理、(四)會社ノ設立、合併及組織變更、(五)擔保物件ノ保管、(六)代理業及委託等各般ノ業務ニ就テ信託會社ノ活躍頗ル看ル可キモノアリ。米國ノ銀行雜誌ノ所論ニ於テ「信託會社ノ機關ナクンバ近世會社事業ヲ行フ事殆ド困難ナル可ク、殊ニ鐵道ノ組織變更及大工業會社ノ金融等皆之アルニ由テ活動ス」ト述ベタルハ必シモ過言ニアラズ。

(B) 法制上ノ原因

米國ニ於ル信託會社ノ發展ヲ助長シタル一大原因ノ法律關係ニ在ルハ看過スベカラザル要件ナリ。即チ國立銀行及州立銀行ハ法律上種々ノ制限ヲ受クルモ、信託會社ニ對シテハ稍寛大ナルノ傾アリ。例バ預金ニ對スル準備金ノ割合ニ就テ、各州多クハ一割五分ノ準備金ヲ信託會社ニ命ズル、(但或州ハ二割乃至二割五分)ヲ常トスルモ、國立銀行ハ二割五分ヲ要求サル。今紐育州ニ就テ見ルニ、一九〇八年迄ハ信託會社ノ準備額ニ對シ何等ノ制裁ヲ設ケズ、昨一九一四年ノ改正法律ニ由テ人口二百萬以上ノ所ハ一割五分、人口百萬乃至二百萬ノ都會ハ一割三分、其他ノ地方ハ一割ノ準備金ヲ必要トスルニ反シ、國立銀行ハ二割五分ノ準備金ヲ強制セラル。

從テ信託會社ハ其資金ヲ十分ニ運用スルノ自由ヲ有シ、今紐育銀行特別調査委員ノ報告ニ據レバ、州銀行ハ全資本ノ七割〇九厘國立銀行ハ七割〇三厘ヲ有價證券、不動産貸附及放資ニ運用スルノミナルモ、信託會社ハ其九割二分迄之ヲ行使シ得ルノ餘裕アリト。隨テ預金利子ヲ高クシテ、預金ノ吸收ニ力ヲ盡スノ餘地アルヲ以テ、自ラ銀行ノ營業ヲ蠶食シ、然モ預金銀行トシテ何等ノ制裁ヲ蒙ルコトナク、諸他ノ銀行ニ對シテ競争上有利ノ地位ニ立ツモノナリ。次ニ多數ノ州ニ於テ普通銀行ハ證券又ハ不動産擔保貸附或ハ他會社ノ株券ニ放資スルコトヲ得ザルモ、信託會社ニ向テ特殊ノ制限ヲ加ヘズ。其他納稅義務ニ就テ、將又政府ノ檢査及監督等ニ就テモ比較的寛大ナル制裁ヲ受クルニ過ギズ。斯テ紐育、新英克蘭、ペンシルベニヤ及インデアナ四州ニ於テ特ニ信託會社ノ勃興ヲ促シタル一大原因ハ是等各州ノ法規ガ普通銀行及信託會社間ニ著シキ懸隔ヲ認メタルノ結果ナリ

ト論ズル者アリ。

(C) 信託會社ノ本質上ノ原因

(一) 信託會社ノ本質上ノ利益トシテ第一ニ掲グ可キハ其營業範圍ノ廣汎ナルニ在リ即チ多クノ州ニ於テ紙幣發行權以外ノ一切ノ銀行業務ヲ行ヒ得ルノミナラズ、尙普通銀行業務以外ノ任務ヲモ併テ行フモノナリ。即チ前述セル個人信託及會社信託ノ外ニ貴重品及有價證券ノ保護預リ、保護函ノ賃貸、貯蓄預金ノ蒐集、其他生命保險、信用保險等ニモ關與スルアリ。殊ニ預託ヲ受ル資金ハ其期間概チ長キニ亘ルヲ常トシ普通銀行預金トハ稍趣ヲ異ニスルノ事情アリ。從テ會社ガ營業資金ヲ放下スルニ當リ自然ニ長期ニ運用スルヲ妨グズ。又貯蓄銀行ハ預金ノ引出ニ付、小切手及通帳ヲ携フルヲ要スルモ、信託會社ニ於テハ斯ル制限ナク、且貯蓄銀行ハ五分以上ノ高利支拂ヲ禁止サル、モ信託會社ニ對シ此禁制ヲ見ズ。更ニ他方ニ於テ新設會社ノ如キ未ダ社會ニ充分ノ信用ヲ博セザルモノガ社債ノ發行ヲ行フモ容易ニ應募者ヲ集ムル能ハズ。斯ル場合ニ擔保物件ヲ信託會社ニ供託シテ所謂擔保付社債信託ヲ行フヲ常トス。加之、信託ヲ受クル資金ト會社自身ノ財產トハ全然分離シテ處理ス可キ制裁アルヲ以テ、會社ノ基礎比較的鞏固ナルヲ得ベク、既ニ説明シタル如ク信託會社ノ破綻ハ他ノ金融機關ニ比シ極テ少數ニシテ、且其破綻ノ結果トシテ預金者ニ與ヘタル損害モ輕微ナルノ事實アリ、是等各種ノ原因相集積シテ該會社ノ好評ヲ齎シタルモノナリ。要スルニ其發展ノ一大原因ハ各種業務ノ兼營、就中信託業ノ勃興ニ在リシヤ論ヲ俟タズ。蓋大都會以外ノ地ニ於テ是等信託業ノ規模尙廣大ナラザル所ナキニ非ズト雖、最近著シク地方的普及ヲ來シ殊ニ州立銀行ヲ合併

スルモノ甚ダ多數ナルヲ見ル。

(二)信託會社ノ個人信託ニ對スル特質ハ延テ後者ノ領域ヲ沒收シテ漸次前者ノ進運ヲ助長セリ。英國及米國內地方ニ於テハ個人信託ノ發達ヲ示シタルモ、夫ハ幾多ノ缺點アルヲ免レズ。例バ管理人ノ死亡、疾病、轉居、資金費消、職務ノ怠慢又ハ經驗少キコトアリ。或ハ感情、偏見及政策等ノ爲ニ支配サル、恐ナキニ非ズ。反之信託會社ハ敍上ノ缺點ヲ免レ得ベク、概シテ其根柢確實ニシテ信用スルニ足ルモノナクンバアラズ。是等各方面ノ原因ハ倚テ以テ益々信託會社ノ隆盛ヲ促進シタルモノナリ。(完結)